

帰国生 A 君、理工へ進学

先日、私が学年主任をしていたときの生徒の父母に海外で出会いました。当然、その生徒 A 君の話題になりました。

A 君はアメリカで小学校のほとんどと中学 1 年を過ごして帰国。中 2 の 4 月の本校の編入試験で不合格になりました。自宅が通える範囲になく寮生で応募したのですが、本人の幼さが寮生としてはまだ無理という判断でした。A 君は中 2 の 9 月編入試験に再挑戦。学科試験は今ひとつでしたが現地校での成績評価が高く、幼さも取れていたため寮生で合格。小さい体格にもかかわらずラグビーにも入りました。入学後しばらくは、慣れない日本語での授業、本校独自の国語の授業（第 5 号で紹介した三読法と二段階討論法です）、初めての寮生活（洗濯・掃除は自分でやります）、ハードなラグビーの練習などでパニックになりかけましたが、持ち前の賢明さで徐々に適応、中学 3 年の終わりには数学も優秀者に入り、様々な行事のリーダーに当選するまでになっていました。

彼の英語も高 1 で英検準 1 級レベルに達していましたし、父親は有名な総合商社勤務で海外を飛び回っていましたので、進路を描いておかしくなかったのですが、個人課題研究で選んだテーマは「古い建築物と現代への利用法」。理工系を選び、進学先は東京工業大学第 3 類でした。今春大学を卒業し、就職先は有名な証券会社の霞ヶ関本社勤務でシステム管理と開発を担当する部署に配属されたそうです。

帰国生 B さん、医学部へ進学

同じ学年で、A 君と同じ中 2 の 4 月編入試験で、やはり数学試験結果が不振だったものの米国現地校成績と面接評価で魅力を感じて合格になった B さんの例を紹介します。彼女は数学が不振だったため当面は数学の放課後補習があると聞かされて発奮。試験は 7 月で入学が 9 月だったわけですが、その 2 ヶ月の間に猛烈に数学を独習。更には 9 月以降も大好きな運動を我慢して毎日すぐ帰宅し数学の勉強。何と信じられないことに中 2 の後期定期試験で数学の優秀者に入りました。

非常に根性のある彼女はその後バスケットボール部に入り、チームを引っばる活躍をし、一方進路は医学に定めて個人課題研究ではインフルエンザウィルスをテーマにしてウィルス培養実験を行い、進学先は東京女子医科大学でした。



この学年の米国からの帰国生は全部で 11 名いますが、この 2 名以外の進学先は東京工業大学第 7 類生命理工学部、慶応義塾大学環境情報学部、慶応義塾大学法学部、同文学部、早稲田大学理工学部 2 名、武蔵野芸術大学、東京女子大学現代文化学部、獨協大学外国語学部です。6 名、つまり半数以上が理系進学でした。

「理科好き」にする秘訣？

私は化学の教員ですので、子どもたちが理系に興味を抱くためにどのような条件設定が必要かを日常的に痛感しています。

面白い実験（特に中学生レベルでは手品のような実験が人気を集めます。米村傳治郎氏の番組が好評を得る訳です。本校でも中 1 の化学では爆発系実験を含め年間 10 回実験をします）、わかりやすい授業は両方とも必須条件ですが、私が特に留意しているのは自然現象が自分の頭で理解でき説明できるものだという経験をさせるということです。化学では中学 1 年であろうとも、ボーア理論や電子軌道の意味を理解しそこから諸現象を説明できると感じた瞬間、「理科嫌い」が霧消します。

本当の理数系好きの子どもを育てるのは、カリキュラムの理数系科目の時間数増でも「おもしろ理科先生」でも無く、真実を分かりやすく系統立ててきちんと教えることが必要であると考えています。そういう授業の積み重ねがあって、更に体験的に自分の将来像を考える機会が与えられて、初めて勇気をもって「この分野に進もう」と決断できるのだと考えています。

茗溪学園中学校高等学校

〒305-8502 茨城県つくば市稲荷前 1-1

TEL. 029(851)6611 (代) FAX. 029(851)5455

www.meikei.ac.jp

田代 淳一

たしろ じゅんいち

茗溪学園中学校高等学校 教務部長・教員（化学）



茗溪学園では前向きで明るく逞しく積極的な青年が育っています。

「有名大学に行きたいから勉強する」のではなく、「中学・高校時代にいろいろな事に挑戦し、失敗し、考え、自分を探して、自分で自分の将来をみつけ、自分で歩いていく。その方向が地球を救い、人類の未来を拓く方向であってほしい。」そう考え、支援するのが茗溪学園の教員の役割です。

海外生・帰国生が自分の力で自分の未来を切り拓いてきた経験はここで開花します。これまでたくさんの帰国生が、夢を追いながら進学していく姿を見て応援してきました。



中学・高校生の「理科離れ」が、技術立国を目指す日本の将来を危うくするとして問題になっています。また、「帰国生に理系は無理」というのが定説のように言われています。

しかし、茗溪学園では、教職員が一体となって、生徒達にさまざまな知的刺激を与えて、自分自身で進路を探らせる指導をしています。そのまとめが高校 2 年生必修の「個人課題研究」です。

このような学校全体の取り組みや中学 1 年から高校 2 年までのカリキュラムがあって、はじめて、卒業生の約 4 割が理数系の学部に進学していくのです。この理数進学の割合は、日本の普通科の高校の中で群を抜いて高いものです。帰国生にとっても貴重なチャンスです。

「理系」「文系」と決めつけることなく、生徒に進路を考えさせる指導は、実は、子ども自身に「生き方」を考えさせていると思うのですが？